

美の創造者——野口先生の魅力

日本文学科三十一期卒業 秋山京子(桂翠)

とにかく情熱の塊のような先生である。しかもかなり温度が高い。それは、私が先生のお宅の門を叩いた二十三年前と少しも変わらないどころか、益々熱い炎を燃やし続けていらっしやる。まるで太陽のコロナのように。しかし、それは他を威圧するよな強さや熱さではなく、他を受け入れる懐の深さ、広さがある。虚飾を嫌い、実を好まれる人柄は、書かれる文字の選文からも伺い知ることが出来る。人や物の本質を見抜く眼は鋭く、「これだ!」と閃いた瞬間更に輝きを増し、もの凄い勢いで紙に向かっっていく。部屋の中は、紙の上を走る筆の音、くい込む重み、そして深い墨の香りに包まれる。作品が生み出される場に立ち会える至福。「これも『桃李もの言わざれども、下自ら蹊を成す。』というように、人々が各地から稽古に集まる所以である。」

書家の目は時として、好奇心溢れる科学者の目になる。近年の墨色研究では、紙の繊維や硯の断面、宿墨の中のバクテリア等、電子顕微鏡写真を傍らに、科学的根拠から墨の神秘を解明された。更に鄭道昭摩崖書の研究では、石質等多角度から分析、考察された。

このように発見、感動の連続である先生故、大学でのユーモアを交えたご講義も、和やかで熱気に満ちていた。また書道部や社中の合宿では、「ここへ来たからには、来て良かったと思える何かを掴んで帰って欲しい。」と、自らも濃墨、淡墨を使い分け、次々と大字書や半折作品を書かれた。学生との親睦を図りながら、夜を徹して心の通ったご指導を受けることができた尊い日々を、私は生涯忘れない。私が教職に就く時には、「作品の批評は、まず良い点を見つけて褒め、次に今後の課題を示すとよい。」と話してくださった。なるほどこれが、学生の意欲を引き出すコツだったのかと納得したものだ。

そもそも先生の書作における美意識は、陶芸、俳句、音楽、絵画を実作し、多くの芸術と重なり響き合いながら醸し出されている。だから雄大なスケールの作品の周囲に漂う空気は冴えている。そして、たゆまぬ美の追究をされている先生のお言葉は、一言一言が胸に滲みる。「ものは上辺だけで見ず、心で視る。人の話は頭で聞かず、心で聴く。」こうして、生きていくうえで大切な、全てに心を込めるということにも気づかせてくださるのだ。これらのことは私の中で仕事や子育ての基本として、先生

の教えを活かしている。

大学進学先を決定する頃、私は地元の書家から「書を志すなら、野口白汀先生のいらっしゃる大東はすばらしい。」と勧められた。本当にその通りだった。私の人生の根底を支えるこの出会いを、神に感謝したい。今でも門人であることを誇りに思うと共に、先生の口癖「わたしのあと十数年は、一番脂がのって書ける時」が、永遠に続くよう、弟子の一人として心から願ってやまない。